

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 6

# 年間優勝に王手

鹿島釣狂



## 釣遊会第6回大会

☆開催日 平成12年10月22日

☆開催場所 旭漁港～南東洋港

☆入釣場所 東歌別

☆潮 満潮 19:31 123cm

干潮 4:34 46cm

満潮 12:45 117cm

☆釣 果 アカハラ 385 mm 1

カジカ 450 mm 5

ハゴトコ 13

重量 469 0g

☆成績 合計 1304 点

順位 優勝

持ち点 1 点

累計点 13 点 (4回計～1位 岡15点 前野16点)

21 点 (5回計～1位 前野22点)

29 点 (6回計～1位)

## 送られて来た成績表

釣遊会事務局から今年度開催された大会での5回分の成績表が送付されてきた。なんと驚いたことに3回計で12点の1位に4人が並んでいる。嵐、佐々木、島氏に混じって私の名前が載っているのである。13点が3人で岡、荻野、前野氏。14点が大前氏。15点が吉井氏。3点差の中に9名が団子状態でひしめき合っているのである。この9名の誰しもが今年度の年間優勝の可能性を秘めている。もちろん、この私もその確立は少ないがその仲間に入っていることは事実である。このトップグループから抜け出すためには今回の第6回大会の成績が大きく行方を左右する状況にある。

私は今回の大会日に重要な会議が入っていたが事前に他のことに理由をこじつけて欠席させていただいた。出発日にも急遽、新たな会議が午後から入り、出席を依頼されていたがそれも断った。慌ただしく仕事を切り上げ、早速、エサの準備に取り掛かる。

エサは、イカゴロ70本、カツオ10本、サンマ4本、イソメ1箱である。カジカのエサにはアカハラがよいと前回の大会で言われていたが準備する暇は無かった。

## 鼻息を荒くして

出発時刻にはまだ1時間も余裕があるがゆとりをもって集合場所に向かった。その思いは誰もが同じなのであろう。年間優勝を争っている仲間を含めてたくさんの会員が先に集まって来ており、頻りに密談を交わしていた。この時期どうしても年間成績の事が話題と

なり、鼻息を荒くしている者はそのターゲットとされ、プレッシャーが掛かる。案の定、島氏は釣り場の下見をして来ており、今回は新浜に入るらしい。彼は一昨年も年間優勝を嵐氏と最後まで争ったが結局2位に甘んじておりその意気込みが伺える。

私は、10月の大会が職場の行事と重なることが多いためほとんど参加したことがない。また、釣遵会では10月の大会を襟裳方面より手前で実施して来たため状況がよくわからない。会員の多くの皆さんは近浦辺りで降りるらしい。私は春の実績からいって他によほどの情報がない限り入釣場所は東歌別と決めている。10月とは言え、その先の歌露や東洋に入る仲間がいるのだから、東歌別も可能性を秘めているのは間違いない。

私は鼻息を荒くして、東歌別でバスから降りる。いつもの通りバス停からの下り坂をエサで満杯のバツカン詰め込んだリュックを背負い下って行くと、セントバーナードが私の気配を感じたのであろう、やはり鼻息を荒くしてウォン、ウォンとうるさく吠える。塀についての困いの中からはあるがそれを乗り越えて今にも飛びかかってきそうな物凄い勢いである。真夜中に通る人影は釣り人で慣れているはずなのだが・・・襲ってきたら貧相な私の体など人噛みであろう。幸い飼い主が玄関口から出てきたので甘えるようおとなしくなった。

舟揚場前では、小さなスピッツがこれまた鼻息を荒くしてキャンキャンと吠える。スピッツの方はキャップライトの光を向けて近づいて行くと吠えるのをやめる。しかし遠ざかると、またキャンキャンとやる。動くたびに何度か吠えられたが、そのうち「こいつは自分に危害を加えることはないな」と悟ったのかおとなしくしてくれるようになった。

## 期待以上の嫁

釣り人は見渡す限り誰もいない。舟揚場前は潮が引いており、春の大会だと隠れているはずの岩がかなり剥き出しになっている。しかし、いつもの岩に乗るにはまだ時間があるので舟揚場前の溝に投竿する。舟揚場に付いた水銀灯が明るく海面を照らしていることもあり、防潮堤の陰となり光が届かないところにコマセネット付きイカゴロ天秤仕掛けをドボンとやる。3本目を準備していると、早速ブルブルとしたアタリがある。竿に飛びつき、竿先が海面に向かって突き刺さるのを見計らい確実に合わせて取り込む。ブルン、ブルンと体を揺らし、白い腹を見せながら40cm弱のアカハラが上がってきた。期待以上の嫁であり、浦島太郎1号（加藤 啓 氏）だと、こよなく愛するアカハラちゃんにズリズリ、ズッコおおおと頬擦りするか、バツババツ、プチュプチョ、ブッチよよンと抱擁するところであろうか。

アカハラちゃんの針を外していると2本目の竿にもアタリがある。ガタガタッと竿尻が持ち上がった。カジカだ！ 期待には満たない30cm弱のカジカがイカゴロを唾えて上がってきた。3本目を出す暇が無く、次々とアタリがありハゴトコ、カジカ、ハゴトコ、カジカ、ハゴトコ・・・と続いた。ようやく3本目を出し終えたのは入釣してから1時間程後であった。今日は幸先がよく、婿になるはずのカジカは小さいが2魚種5匹が揃ったの

で、余裕のある釣りができそうである。

## 黒々とした獲物の正体は？

潮がかなり引いてきたので、舟揚場の左方向の様子を伺う。溝が何本もありいかにも大ものが潜んでいそうな雰囲気である。更に余裕があればこちらにも打ってみよう。舟揚場に戻って打ち直す。獲物がハゴトコばかりになって来たので2本を遠投に切り替える。

2時半、遠投した方の竿尻が音もなく持ち上がって空中で止まった。更に、ビクン、ビクンと竿を大きく揺らしている。竿を煽りリールを巻くと、時折、大きく頭を振る感触と竿を通して伝わる重量感が大物を予感させる。防潮堤の際まで寄せたところでゴツゴツとした感触が手に伝わり止まってしまった。更にリールを巻こうとするがその獲物の重さで道糸がキリキリと悲鳴を上げている。防潮堤の上に一気に持ち上げるのは無理と判断し、防潮堤の上に身を乗り出し様子を伺うと、今では潮がすっかり引いて、岩が剥き出しになっている。その剥き出しになった岩の上にはキャップライトの明かりを受けて黒々とした大きな獲物が僅かに見えるが何物かは定かでない。大きなうねりもなく、獲物が波に浚われることもないのを確認して、いったん竿を防潮堤に立て掛け、私からその獲物を迎へに行くことにする。軍手をはき、針外し用のペンチを持ち、右に見える階段状の舟揚場から回り込んだ。

キャップライトの光りに浮かび上がった獲物は黒々とし、大きなお腹を抱えたカジカである。針は上唇にガチッと刺さり、指先では外すことができず、ペンチのお世話になった。大事に懐に抱えて釣り場に戻る。40cmのバツカンに当てると大きく尾鰭がはみ出ている。45cm以上はありそうだ。今年の釣遊会の年間大物賞のカジカ部門は不調であり該当者が出ていない。会では45cmが規定となっているので審査の時を考えてフラシで生かしておくことにする。

潮がいよいよ引いて来たので移動するために片付け始めたが遠投した竿にまたまた大きなアタリである。先程と同じように重く、しかもグングンと突き刺さる手ごたえがあり、アブラコの可能性を抱かせる。こいつも防潮堤の上にクレーンすることは敵わず、先程と同じように階段状の舟揚場から回り込み期待に胸膨らませて獲物を見る。しかし、今度も同じような大きさのカジカであった。先程とは違って淡い褐色のカジカであったが・・・。

## 移動を繰り返し替へすも

時計を見るとまだ3時である。カジカの婿とアカハラの嫁で1300点は取ったであろうか？ 優勝とまでは言わないが上位入賞は確実である。さらに確実な優勝を目指してアカハラの嫁を上回るアブラコにねらいを定めて移動する。最干潮時ではあるが、春よりは潮が引き切らないのと暗いので慎重に岩の先端に出た。先端部は波が打ち寄せ、足元を洗うため釣りづらい。そして、いつもの遠投場所で上がってくるのはずのアブラコはおらず、様々に方向を変えて打ち返すことになる。しかし、ハゴトコだけが海水面をたたきながら

いとも簡単に上がってくるばかりである。

6時ころ留吉の沢方向に移動する。途中の舟揚場で老人と子どもが竿を出している。老人に近寄り、最近の釣りや海の状況などを話しこんでいると、よいアタリが出て、子どもの方がハゴトコをダブルで引き抜いた。ビクを覗かせてもらうとかなりの数のハゴトコが収められている。その子の父親と3人で釣りに来たが、父親の方は荻伏で竿を出しており釣果の方はあまり芳しくないとのことである。荻伏から東歌別に来る途中、何度か釣り人に尋ねて見たが釣果の方はあまり芳しいものではなかったとのことである。近浦付近で下りた釣遊会の仲間たちはどうであろう。老人の言葉から苦戦を強いられているのが予想される。

### 遠ざかる潮騒

舟揚場前の溝が沖に伸びており、その右先端の岩に出て竿を振る。アブラコを求めて昆布根周りに盛んに遠投を試みるがやはりハゴトコしか上がらない。干上がりかけた岩盤の際にはいたる所にウニが張り付いている。その馬糞ウニを拾い殻を割って食してみる。甘い芳醇な香りが口の中一杯に広がる。ウニ独特の鼻にフンと抜ける香りである。陽も差し暖かくなってきたので、岩の上にとっかと腰を据えリュックに詰めておいたワンカップを取り出し喉元に流し込む。口の中がカッと熱くなり、それにも増して妙に酒が甘い。ウニをまた何個か拾ってきてそれをつまみに酒を飲む。いつもはリュックに詰め込んだ酒など釣りで忙しくて飲む暇はなく、給局、帰りのバス待ちやバスの中で喉を潤すことが常である。しかし、今日は1300点は確保しているというゆとりからか2本目も開けることとなる。潮騒の音が耳から遠ざかり少し微睡む。

潮が満ちてきて芋尻が波で揺れ、バッキンも流され始めたので最初に入った舟揚場に戻る。しかし、いったん途切れた集中力は戻るはずもなく釣果の方はハゴトコのみであった。今回の大会は初めの3時間の勝負であった。その後は全くの入れ替えなしで結果として移動せずにもよかったことになる。審査用のビニルバケツにカジカ4本とアカハラを詰め込み早めに切り上げる事にした。夜中、一生懸命しつつこくほえ続けていたスピッツに別れを告げる。夜目には恐ろしい形相をしていたセントバーナードも明るくなって見ると、なんだか別れのあいさつを交わしてくれているように尻尾を振ってくれている。

### 他人の釣果に一喜一憂

釣遊会の黄色い旗を前面にバスがやって来た。前野氏が入り口で迎えてくれる。釣果を尋ねられ、思わずカジカの大漁と口が滑る。しかし、審査までは私のそして皆さんの楽しみを奪わないように、嫁のアカハラには触れないでおく。前野氏は私より大きなカジカをあげたいらしい。次々とバスに乗り込んで来る仲間が私の釣果を尋ねてくれる。いつもは私の釣果など気にかけてくれる会員などいないのだが……。年間を争っている位置にいるせいなのだろう。私とて仲間の釣果が気にならない訳はない。勝負が掛かっていないのな

らお互いの健闘を称え合うところであるが、バスの中で他人の釣果を開いては一喜一憂し、今日の成績を推し測るのである。会員の皆さんとて最後の隠し球はとっている事が多い。そして、審査会場での予期せぬ大物に口をあぐりと開けるのである。

新浜から上がってきた島氏が盛んにぼやいている。島氏の下見で5人が新浜に入釣したが、その中で彼が一番釣果が上がりなかったとのことである。口調からしてかなり荒れているのが解る。バス待ちで買い込んだビールをかなり飲んだらしい。ゲンを担いでイチローのように、髭を剃らないで大会に臨んだことも話題に載せられている。彼の気持ちが痛いようによく解る。

### とれないにやけ

審査の結果、優勝は私であった。成績はカジカ 450 mm+アカハラ 385 mm+4690g=1304点である。準優勝は中近浦に入った岡氏で 1128 (カジ 402 mm+アカ 373 mm+3530g) 点。3位は歌露に入った前野氏で 1088 (カジ 462 mm+ハゴ 290 mm+3360g) 点、4位は下近浦に入った嵐氏で 1056 (カジ 377 mm+アカ 329 mm+3500g) 点であった。私のカジカは450mmcmジャストで年間大物の対象にはなるが前野氏のカジカ 462mmには一歩及ばなかった。この結果、4回計では私が一歩リードしたことになるが、点差は開かず結局この4人が7回大会で年間を争うことになる。

7回大会の入釣範囲をバスから眺めながら、何げなく大会参加が微妙であることを漏らした。すると、年間には関係のなくなった仲間が「釣りバカ日記の浜ちゃんのように親戚でも殺してしまったら」と物騒な事を言う。その言葉が今の私にとっては現実感があるものとして妙に心に響く。帰りのバスでは皆さんの冷やかしのプレッシャー作戦の言葉も心地よく耳に響き、それを子守歌にしながら眠りについた。

帰宅後、重量優勝の賞状とトロフィーとをテーブルに無造作に置く。目ざとく見つけた娘が歓声を上げてくれる。女房殿もそれに仕方なく付き合い「記念撮影するんでしょ」とこちらの心を見透かしたように娘を促す。獲物と私の妙ににやけた頬をフィルムに納めた後、早速カジカの魚拓に挑戦してみた。目を入れて見るとなかなかの出来栄でそれを自慢しながらまたビールを飲む。今日はどうした訳か女房殿も私の優勝にワインで付き合い合っている。日本酒に切り替えトロフィーを床の間に飾りながら「来年はこの床の間に1年間、優勝旗を飾ることになるから」と大法螺を吹く。

「そんな邪魔なものいらないよ」と応酬する女房の顔に浮かぶ笑い（昔は天使の微笑みであり、その笑顔につい騙された）は満更でもないことを告げている。家庭ではいつも気難しい私の顔に気味の悪いにやけ顔が折り交ざることがしばらく続いた。

優勝	鹿島釣狂	1304点	(カジ 450 mm + アカ 385 mm + 4690g)	東歌別
準優勝	岡 英成	1128点	(カジ 402 mm + アカ 373 mm + 3530g)	中近浦
3位	前野達志	1088点	(カジ 462 mm + ハゴ 290 mm + 3360g)	歌露
4位	嵐 光博	1056点	(カジ 377 mm + アカ 329 mm + 3500g)	下近浦
身長賞	前野達志	46.2 cm	カジカ	



## 5 大会終了後の成績

### ※3回計

12点～仲俣、島、嵐、佐々木

13点～岡、前野、荻野

14点～大前

15点～吉井

### ※4回計

19点～前野

20点～仲俣

21点～嵐

22点～荻野、島

### ※5回計

28点～仲俣

32点～島

37点～嵐、前野

## 校長採用試験

学校の要である教頭として、教職員の先頭に立ってリーダーシップを発揮してきた。そして、教育管理職としての資質や能力を高め、人間としての魅力を身につけるために日夜努力してきた。

今回は、大会の1週間後に校長採用面接試験を控えているので出席すべきかどうかを躊躇してきた。それが、今回の大会でよい成績を収めたものだから年間優勝をねらって参加しようと思っている。今後こんなビッグチャンスは2度と来ないことが予想される。しかし、私の人生を左右しかねない今度の面接試験である。釣り大会での無様な負け方とその疲れで力を十分発揮できないことも考えられる。果たしてそれだけの価値があるのか。

自信は？ ある。それくらいのことではへこたれているようでは、校長としても大成しないであろう。どちらも自信をもって臨もう。